

飛騨農林事務所の普及活動状況（飛騨版）

平成 30 年 10 月 31 日現在

今月の重点活動

■ 水稻 日本一の産地を目指して

本年、飛騨地域では全国最大規模の米食味コンクールである「第 20 回米・食味分析鑑定コンクール；国際大会」が 11 月 26 日（月）に予定されており、そのプレ大会として「第 4 回飛騨の美味しいお米食味コンクール」が 10 月 26 日（金）に高山市民文化会館で開催された。

今回は過去最高の出品点数を記録し、厳しい予選を勝ち上がった上位 15 点で最終審査（官能審査；実食）を実施、金賞 5 名を決定した。その他、中山間農業研究所等から基調講演、講習会が行われ、11 月に開催される国際大会に向けた生産者及び関係機関の気運の向上に繋がった。

また、農業普及課は大会成功に向け、良食味米生産の指導、出品の勧誘を行い、当日は大会スタッフとして支援を行った。

今後は国際大会に向け、出品勧誘、当日の運営支援、さらに次年度以降の良食味米産地づくりに向け、関係機関と連携し、支援していく。



【第 4 回米コンひだ
金賞受賞者】

新たなブランドづくり

■ イネWCS 自給飼料生産法人に対してWCS用稲の栽培・収穫技術の指導

10 月 4 日（木）に飛騨市において、農業普及課と連携して農業法人、JA 他に対してイネWCS の栽培方法と収穫調製技術について指導した。

飛騨地域では酪農家や黒毛和種繁殖農家と自給飼料生産法人が耕畜連携し、WCS の栽培調製及び給与を推進している。

そこで、水田において収穫間近のWCS用稲の成育状態を調査し、生産者らに説明した。

生産者が専用品種の特徴を活かしたWCS品質向上を実践できるよう革新支援専門員は農業普及課と連携し支援する。



【WCS用稲の
栽培・収穫技術の指導】

多様な担い手づくり

■担い手 農業女子と出会える「農婚」を開催

飛騨管内に在住する男性農業者を対象に、岐阜県での就農と結婚を希望する女性との出会いの場として10月6日（日）に農業体験・婚活イベントを開催した（岐阜県農業経営課主催）。

当日は男性11名、女性12名が出席し、古民家で郷土料理を味わいながらの交流会、トマト収穫体験や古い町並み観光等を通じてお互いの自己PRや交流を図った。開催の1週間前には、男性、女性に分かれて「事前コミュニケーション講座」が開催され、会話のポイントやコミュニケーションの取り方等を学んだ。終了後のアンケートでは、フレンドリーで優しい人が多かった、もっと時間にゆとりが欲しかった、今後は農家への嫁入りや移住によって農業に関わりたい等の意見が多かった。

農業普及課では、農業経営課と連携しながら企画や準備、男性農業者の募集や当日運営の支援を行い、今後もイベント後の状況を継続して確認していく。



【熱心に話を聞く参加者】

■飛騨トマト研修所 地元の古川小3年生児童にトマト収穫体験

飛騨トマト研修所では、去る10月4日（木）に古川小学校3年生の社会見学を受け入れた。

児童65名を対象にトマトの栽培方法や「飛騨トマト」の生産・販売状況、トマトの収穫方法について説明（農業普及課対応）を行ったのち、古川小教員と連携してひとりひとりに収穫体験を実施した。

児童からは、飛騨地域がトマトの主力産地であることを初めて認識した様子で、「トマトの作り方が良くわかった」、「飛騨地域でたくさん作られていてびっくりした」、「トマト農家になりたくなった」等の感想が聞かれた。



【栽培方法の説明状況】

■高山4Hクラブ 岐阜県農業フェスティバルへの出展

10月27日（土）に、県庁周辺で開催された岐阜県農業フェスティバルに高山市内の若手生産者組織「高山4Hクラブ」が出展を行った。クラブ員等が生産した、ほうれんそう・トマト・米等を並べ、訪れたお客さんと対話をしながら販売を行った。品種や食べごろ等の説明をしながら販売を行い、他地域の方へ飛騨の野菜をPRする機会となったとともに、消費者の反応を直接感じる機会となり、今後の栽培意欲の向上につながった。

農業普及課では、今後も視察研修や夜間勉強会等の高山4Hクラブ活動を通じて、若手農業者間の交流や自己研鑽につながるよう支援を行っていく。



【農産物販売の様子】

■ G A P 高校生がG A P取得チャレンジシステムの申請実施

10月1日（月）に飛騨高山高等学校において、生物生産科3年生がG A P取得チャレンジシステムの申請を実施した。

飛騨高山高等学校では課題研究としてJ G A P（家畜・畜産物）を3年生5名が取り組んでおり、G A P取得チャレンジシステムのチェック項目が全て「適合」になるよう昨年度から専門員が実践指導してきた。

今回はチェック項目が全て「適合」になったため、（公社）中央畜産会に対して、W e b上で生徒らが自ら認証申請を行った。今後、J G A P審査員による現場確認が実施される予定である。

革新支援専門員はJ G A P（家畜・畜産物）指導員として、G A P実践について指導する。



【高校生がGAP申請実施】

売れるブランドづくり

■大豆 大豆の収穫が始まる

古川町大豆生産組合は、10月12日（金）に大豆収穫会議を開催し、飛騨市内で大豆を栽培する生産者が今年の収穫作業について検討した。農業普及課では大豆の生育状況を解説し収穫時期の判定法など適期収穫についての指導を行った。

今年は、7月上旬の豪雨により播種期が分断されたことに加え、秋季に長雨となったことから成熟が一律でなく、収穫時期の判定が難しい状況となっている。大豆の収穫作業は10月22日（月）から始まり、生産組織ごとに順次行なわれる予定である。



【大豆収穫会議と収穫作業の様子】

■りんご 各地でりんご「ふじ」の出荷が目前

産地の主力品種である品種「ふじ」の本格的収穫を目前に、J Aひだ果実出荷組合協議会の各組合では、目揃え会が開催された。

目揃え会では、生産者が果実を持ち寄り、選別規格表に沿って熟度や形状、さびの発生程度などの観点から果実を選別し、出席者全員で目揃えを行った。「ふじ」は、贈答需要も高いため、選別精度の向上を目指し、完熟果実の収穫の徹底が図られた。

農業普及課では、今後も引き続き、栽培技術に関する指導を行い、りんごの安定生産及び品質向上に向けた支援を実施する。



【目揃え会の様子】

■山ブドウ **J Aひだ農業まつりで“飛騨山ブドウ”の魅力を発信！**

飛騨山ブドウ研究会では、山ブドウの魅力を発信するために例年“J Aひだ農業まつり”に出展しており、今年は 10 月 20 日(土)、21 日(日)の 2 日間に渡って P R を実施した。

当日は、生のブドウや山ブドウジュース、高校生が開発したアイスの販売を行い、店頭を訪れた消費者に山ブドウ独特の風味が楽しめる加工品の魅力について P R した。

また、高校生が試作した山ブドウのステーキソースの試食も同時に実施されており、試食した消費者からは改善のための様々な意見が寄せられていた。

山ブドウの知名度向上に向けて、農業普及課では今後も継続して P R の実施や、栽培技術向上に向けた支援を行っていく。



【農業まつりでの
出展の様子】

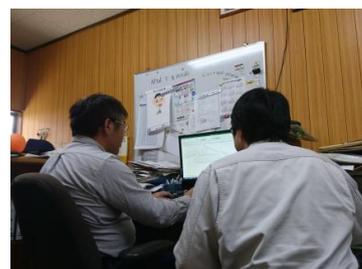
■G A P **県G A Pの審査に向けた現地指導**

飛騨地域では生産者の岐阜県 G A P の導入を進めており、これまでに 1 軒の生産者が岐阜県 G A P を取得している。

取得を目指す生産者は着実に増加しており、平成 30 年度第 3 回目の農場審査に向けて、3 軒の農家を対象にして普及指導員から改善に向けた助言を行っている。

取得を目指す生産者からは「事故が起こってからの対応では遅いので、G A P を導入して事故のリスクを減らしていきたい」といった意気込みがうかがえた。

農業普及課では生産者の経営改善に向けた支援を引き続き行っていく。



【現地指導の様子】

■夏秋トマト **トマト栽培研究班実績検討会開催**

飛騨地域では各地区のトマト部会において、地域の栽培上の課題に対し組合員自ら実証圃などを設置し問題解決に取り組んでいる。丹生川トマト部会では、各地区支部から選出された生産者から構成される栽培研究班で今年度の課題、テーマを検討し、取り組み内容、実証内容を決めている。本年は土壌溶液分析による適正施肥試験を中心に土壌病害対策、マルハナバチ管理などに取り組み、その成果について協議・検討を行った。今後、農業普及課では、データ分析、取りまとめ等で協力し、地域の課題解決に向けて支援していく。



【栽培研究班実績検討会】

■夏秋トマト 高山トマト部会ヘルシートマト班視察研修会実施

高山野菜出荷組合のトマト部会ヘルシートマト班で10月11～12日に市場着果調査と養液栽培の視察研修会を行った。

ヘルシートマト班は食味にこだわり、桃太郎ファイトの栽培について、使用する資材を取り決めて生産しており、北名古屋市場の仲卸会社で着果調査と荷姿の検討を行った。なかでもS玉のパック詰めが良い評価で、生産段階では敬遠する規格が高い評価に生産意識の改善が見られた。

また、海津市の岐阜県就農支援センターで新規就農を目指した研修概要と養液ポット耕のほ場視察を行い、県GAP基準の生産管理と多収栽培の可能性を学んだ。



【着果調査の様子】

■ほうれんそう 緩効性肥料試験の取り組み

飛騨ほうれんそう産地では、長年ぎふクリーン農業基準に基づく施肥管理を行ってきたが、将来的には更に効率が良くて環境に優しい施肥技術の確立を目指していく必要がある。

そこで、農業普及課では県農業技術センターと連携し、緩効性肥料試験の現地試験に取り組んできた。試験で用いた肥料は施用後3作目までは肥効が持続するため、施肥作業の省力化と過剰な肥料分の抑制につながる事が期待できる。

現地試験結果からは、従来肥料と同等以上の収量が得られることが確認できている。今後調査を継続し、普及の可能性について検討していく。



【現地試験圃場の様子】

■飛騨牛 肉用牛肥育農家を巡回指導

10月26日（金）、30日（火）に高山市の肉用牛肥育農家16戸に於いて、産肉能力検定現場後代法に係る肥育牛の調査及び飼育指導を行った。

岐阜県では飛騨牛改良推進事業で、種雄牛候補の産子を肥育農家で肥育し、増体や枝肉形質を調査して、種雄牛候補の能力を判定し、新しい種雄牛の造成を実施している。

今回は、畜産研究所、高山市、JAと連携して肥育牛の個体確認と肥育状況の調査を行い、肥育農家に説明した。

革新支援専門員は、飛騨牛の品質向上を支える新たな種雄牛造成に協力し、その飼育管理技術の指導を行っていく。



【肉用牛肥育農家の巡回指導】

住みよい農村づくり

■秋神地区獣害対策委員会 秋神はサル害対策あきらめません！

10月24日（水）に高山市朝日町秋神地区の西洞公民館で、サル対策のための大型囲いわな導入について、住民と県、高山市の計12名が検討を行った。

秋神地区は数年来サルが急激に増え、箱わなでの捕獲や駆除はしているものの、群れによる大規模な農産物被害を受けるとともに、集落の中にも常時サルが徘徊する現状となっている。

そこで、農業普及課では一度に15頭が獲れることもある大型囲いわなの導入を提案し、秋神地区の西洞を中心に取り組むこととなった。この最新の大型囲いわなは、群れが出入りするまで餌付けする必要があるが、軽量で簡単に移動でき、これまでの定説とは異なりサルの被害を軽減することが実証されている。農業普及課は大型囲いわなの導入によって確実にサルの被害を減らせるよう、住民主体の実践的な捕獲体制の確立を支援していく。



【おおっこんなに獲れるのか！】